

西谷のはじまり

はじめに

この第1章「西谷の歴史」では、『宝塚市史』を基に、古代から近現代までの西谷の歴史、西谷の軌跡をたどりたいと思います。

そして、歴史の中でも、人の営み、里山の発達、今日の西谷の各地区につながる村々の成り立ちなどに関係のある史実を中心に、歴史的な側面から里山・西谷をひも解いていきたいと思っています。



『宝塚市史』全巻

こうばこしんでん

香合新田で石器の発見

西谷の北部、香合新田（map.B1）の畑の中ゆうけいせんとうきで有茎尖頭器が発見されました。

香合新田で採取された有茎尖頭器は、サヌカイト製で現存長 4.1cm、最大幅 2.1cm で縄文時代草創期（紀元前 1 万 6 千年～紀元前 7 千年）のものです。石器の形態から狩猟用の投げ槍の槍先と考えられていますが、伴出する遺物がないので明確な編年や位置づけは不明です。この時代にはまだ弓矢がなく、やや大型の動物を獲物としていたと考えられます。

また、香合新田では石鏃せきぞくも発見されています。こちらは縄文時代中期のものと考えられ、弓矢の先端部につけられたもので、狩猟に使用されたものと考えられます。

西谷で発見されたのは石器のみで、その他の遺跡・遺物が見つかっていないことから、これ以上の詳細を知ることはできません。



香合新田採取の石鏃
『宝塚市史』

有茎尖頭器
『宝塚市史』

西谷の古墳

西谷では、大原野西部古墳群と呼ばれる 2 基の後期古墳が確認されています。この古墳は宝塚市立宝塚自然の家の西方の尾根上にあり、従来から地元で「オシヅカ」と呼ばれていた 1 号墳と新たに確認された 2 号墳からなっています。

2 基とも径は不明ですが円墳と考えられ、横穴式石室を内部主体としています。1 号墳、2 号墳の石室は全長約 5 m、幅 1.5 m で、奥壁・側壁の一部が露出していますが詳細は不明です。遺物は確認されていませんが、築造年代は石室の形態から考えると 6 世紀の後半の頃だと考えられています。

この古墳群の存在により、6 世紀の後半において西谷にも開発が進んでいたことが考えられ、人が定住していたと考えることができます。西谷の歴史を解明する上で、この古墳は重要な存在といえます。

西谷の発展

荘園とは

荘園は、朝廷が奈良時代に律令制下で農地増加を図るために制定した墾田永年私財法（743 年）により始まりました。それまでは、公地公民制度のもと、土地と人はすべて朝廷（国・天皇）のものでした。墾田永年私財法により、自ら耕し、開墾した土地に国家が永続的な私有を認め、有力者による大規模な墾田が行われ、荘園制として定着していきました。

多田荘園

安和元年（968）に神託を受けて、一族郎党を率い河辺郡の多田盆地に移住した源満仲みなものみつなかは、鉾山の開発を進め、天禄元年（970）に多田院を創建し、武士団攝津源氏の基礎を固めました。長徳 3 年（997）86 歳で死した、満仲の廟は多田院と同一視され、神仏混合思想のもとで、朝廷・武家の篤い崇敬を受けました。仁平 3 年（1153）に摂関家領として初見する多田荘は、攝津源氏の棟梁から 11 世紀頃に寄進されたとみられ、河辺郡北部をほぼ版図とする広大な荘園となりました。中世を通して多田銀銅山は重要な経済基盤とみなされ、その支配圏は、宝塚市域北部の西谷にも及びました。



多田神社

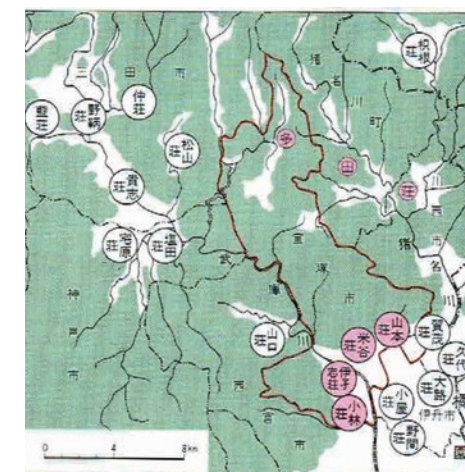
西谷と多田荘

多田荘は現在の川西市の多田盆地、多田神社（map.D4）周辺を中心部分としていましたが、猪名川町のほぼ全域、宝塚市西谷、さらに西側の三田市の一部にも広がっていた広大な荘園でした。

おそくとも平安時代後期には、西谷の佐曾利村（map.B2）が、多田荘の一部となっていました。

荘園制が発達するにつれて、農業のうえでは集約的な農業が方向づけられました。鎌倉時代に入ると、農業の集約化はいっそう進展し、わが国の農業の大きな特色である水田での米麦の二毛作がはじまりました。

一方小規模新田の開発も盛んに行われました。はづ波豆・西長谷・玉瀬・大原野でも新田開発が行われていた形跡がうかがえます。新田の開発は、谷川にそった山間の小さな棚田を一枚一枚拓いてゆく農民の努力によって行われたものでした。多田荘の年貢増加になることから多田院などが新田開発を奨励したものではありましたが、農民にとっても、生活の安定と向上のための開発であったと思われます。



荘園の分布『宝塚市史』

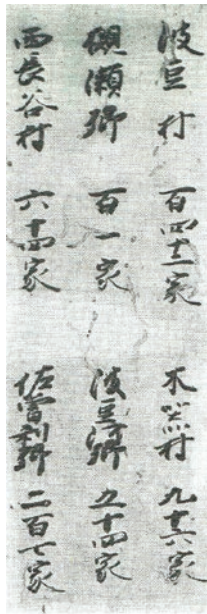
村の発達

貞治2年(1363)から多田院では大規模な金堂屋根の葺替工事を行っています。金堂の上葺工事は応安元年(1368)までに完成し、同年4月、完成供養が行われました。また、永和元年(1375)には法華堂・常行堂・地藏堂などの修造が完成し、供養が行われました。応安元年と永和元年の両度とも、供養の費用は多田荘はじめ周辺諸荘に棟別銭を課して徴収されました。

各村々の棟数と棟別銭を書き上げた史料が、応安元年の「多田荘等棟別銭村別注文」です。この史料には佐曾利、玉瀬、西長谷・波豆・大原野・切畑が所領としてつらなり、うち玉瀬・大原野では百姓が逃散(領主への抵抗手段として、他領に逃亡すること)中でした。

中世の村は、室町期ごろには「惣村」と呼ばれるもので、血縁や地縁から地域の集団体制が生まれ、近畿を中心として各地に広がっていきます。近世になると、幕藩体制のもと村請制度などに受け継がれ、名主や庄屋を中心として年貢を納める石高による納税体制に変化していきます。

これらの村々は檀家制度などで、一層、地域社会に拘束されるような形態に変貌していきます。



応安元年の「多田荘等棟別銭村別注文」『宝塚市史』



波豆八幡神社

満政はこの地に宮社を築き、満政自らが神影を彫刻し、社にお祀りしたとの伝承があります。

現在の本殿は応永10年(1403)に建てられたもので国の重要文化財に指定されています。水源池に面して立つ石鳥居は応永32年(1425)のもので、兵庫県の有形文化財に指定されており、三田市の酒垂神社にも同材、同形式のものがああります。

また、波豆八幡神社の対岸には普明寺(map.A3)があり、源満仲にまつわる龍馬神の雨乞い伝説が伝わるお寺です。墓地に残る石造の宝篋印塔や笠塔婆のほか、持国天など四天王を描いた木製の厨子扉絵等が県や市の指定文化財になっています。

石造美術と波豆

中世には、民衆の祖霊崇拜・父母供養などの厚い神仏信仰に支えられて、多様な文化が生み出されました。当初は加工しやすい木材や金属で作られていた品が、石工たちの手により、恒久的に残るものとしてさまざまな形態の石造美術がつくりだされました。

西谷は中世石造美術品の宝庫で、今日に中世の村の雰囲気伝えてくれます。

特に波豆地区には西谷の中でも中世石造美術品が集中しています。西谷の波豆地区を中心とした石造美術の材料には地元の石英粗面岩(波豆石)がもちいられており、波豆八幡神社の前に広がる神戸市千刈水源池の中にかつての石切り場跡が確認されています。花崗岩(御影石)を用いた石造美術は県内のほぼ全域で見られますが、西谷には花崗岩(御影石)を用いた石造美術が見られないことは他の地域とは異なる特色です。波豆の石造美術の制作は1290年から1570年頃までの約280年間といわれています。

現在は、波豆八幡神社の境内の西端に石造美術品の一群があり、これらは境内東側の斜面にあった金福寺に立っていたものですが、千刈水源池を造るときに水没することからここに移されました。代表的なものは、全国で2番目の大きさで高さ約4メートルの板碑で、五輪塔・宝篋印塔とともに兵庫県指定の文化財になっています。

また、三田市高平地区にも波豆石を用いた中世の石造美術があります。文化的に共通の地域圏を形作っていたものと考えられます。



波豆の石切り場跡『宝塚市史』



波豆八幡神社の嘉暦三年三尊種子板碑

堂坂遺跡

昭和46年(1971)11月市立西谷中学校の運動場拡張工事に際し西側道路を付け替える工事を行っていたところ畦道の下で埋蔵された古銭入りの壺が発見されました。

堂坂遺跡(map.B3)の所在する畦下の土層は盛り土を掘り込むと耕土があらわれ、さらにその下に床土がありそれを掘り込んで幅約1m、長さ約3m、床土から約80cmの深さで土壇をつくっていました。壺は南東に添って北西面にほぼ一列に7個置かれていました。

7つの壺はいずれも古丹波の壺で、壺の形態から、壺が作られた年代は室町中期以降と考えられています。壺の中には銅銭がゴッシリと詰まっており、その後の整理によって約19万5千枚が確認されています。埋蔵されていた銭貨により、室町時代中後期から戦国時代に埋蔵されたと推測されています。

では、誰がどのような目的で大量の銭貨を埋蔵したのでしょうか。埋められていた場所の地名は堂坂といわれ、付近一帯が古く宝山寺の境内であったと伝えられています。これらの銭貨は信者より宝山寺に寄贈もしくは祠堂銭(お寺が農民等にお金を貸して利子を取ること、現在の銀行のような役割をしていた)を、戦乱による盗難や紛失などをおそれて埋蔵したと考えることができます。

そして何より、7つの壺いっぱいのは貨幣は、中世後期の西谷で貨幣経済が盛行していたことを物語っているといえます。これらの銭貨は実際に大原野の村々で通用していたものであり、農民たちは生産物を市場で売却し貨幣を入手し、農具をはじめとした生活諸物資をその貨幣で購入しました。また、段銭や棟別銭を納入し、年貢や公事なども貨幣で納入することがあったはずで、より有利に貨幣を入手するため、米や麦のほかにも商品作物などの生産がおこなわれ、また炭の生産などもおこなわれていたかもしれません。貨幣経済の浸透は、生産の発達と村の発展において不可欠なことでした。



堂坂の古銭出土地点『宝塚市史』



堂坂遺跡 出土状況『宝塚市史』

鉾山と西谷

多田銀銅山の繁栄

多田銀銅山（map.C3）は川辺郡猪名川町を中心に、川西市・宝塚市・大阪府豊能郡にわたる、東西・南北ともに十数キロメートルにひろがっています。このうち親鉾といわれる主要鉾脈で古い歴史をもつものは二筋あり、ひとつは川西市国崎付近の奇妙山親鉾、他のひとつは猪名川町鉾山を中心とする地区の鉾山親鉾で、ともにほぼ南北に走っています。

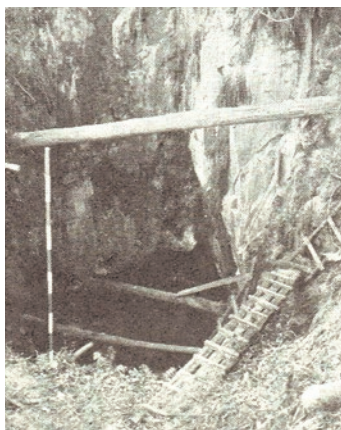
桃山時代にもっとも盛んに採掘されたのが、鉾山親鉾の瓢箪間歩（間歩は鉾山の坑道こと）（map.C3）・台所間歩・千石間歩でした。瓢箪間歩は室町時代に盛山となり、天正年間（1573～1591年）豊臣秀吉の時代には銀・銅の鉾石（鉾石）をだして、大いに栄えました。これによって秀吉は、山先（はじめてその鉾脈を発見した山師）原丹波・原淡路の二代に賞として馬印の千成瓢箪を与えたので、この間歩を「瓢箪間歩」と呼ぶようになったといわれています。「台所間歩」も秀吉の時代に大いに栄え、そこからでる鉾石の益銀で大阪城の台所の入用をまかしたので、その名がついたとされています。「千石間歩」もまた秀吉のころ月々1000石の運上銀を上納したので、この名がついたそうです。そして鉾山経営のために、鉾山町広芝に陣屋を建て、旗本の岸島伝内・川瀬八兵衛を奉行として、足軽・同心200余人をおいて鉾山口を守備したと伝えられています。

西谷の間歩

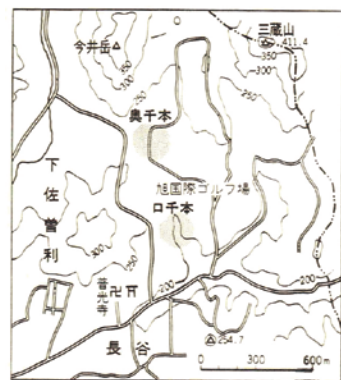
この鉾山親鉾の間歩が、安土桃山時代の多田銀銅山における中心の間歩でしたが、それから分かれた枝鉾が西谷を走り、それがまたこの時代に盛期を迎えていました。それらは、長谷村・下佐曾利村領内の千本間歩（map.B2）と南切畑村領内の紺青石をだす諸間歩です。

「多田銀銅山来歴申伝略記」によれば、長谷村口千本・下佐曾利村奥千本とも「足利家ノ御時発起」とあり、千本間歩は室町時代に大繁盛し、銀・銅を多量にだしました。鉾民その他の人家は数百軒にのぼったそうです。

一方南切畑村領内には、江戸時代に紺青間歩・宮之上間歩・入木谷間歩・金精山間歩・金精山大盛間歩など38箇所の間歩がありました。その38箇所の間歩のうち、紺青間歩など先述した間歩は天正年間に至って紺青石を多量にだすようになりました。豊臣氏は天正14年（1586）6月3日、朱印状をもってこれらの間歩を絵所の狩野山楽に与えました。そのため紺青（青色顔料）を精製する鉾民が、多数住むようになったそうです。



長谷の千本鉾山間歩跡『宝塚市史』



千本鉾山付近図『宝塚市史』

鉾山の盛期

多田銀銅山が豊臣時代をさらに上回る最盛期を迎えるのは、明暦～寛文（1655～1673）のことでした。多田銀銅山では西から鉾山親鉾・奇妙山親鉾・七宝山親鉾・高山親鉾といわれる4つの主鉾脈がほぼ南北方向に走っていますが、明暦～寛文期には、鉾山親鉾では鉾山町（猪名川町）の大口間歩・瓢箪間歩、奇妙山親鉾では国崎村（川西市）・民田村（猪名川町）の地区、七宝山親鉾では黒川村（川西市）・吉川村（大阪府豊能町）の地区が盛山となっていました。

なかでも大口間歩はこの時期の中心の間歩でした。この間歩は慶安・承応（1648～1655）のころ大阪の米屋弥左衛門が出願し稼行（採掘）していましたが、同人が関東で犯した旧悪が露見して稼方追放となつて後、万治2年（1659）からは、鉾山町の津慶吉兵衛が出願して稼行していました。彼が同3年2月からさきに米屋弥左衛門が稼行していた間歩のくずれふさがったところを取り開ける普請をしたところ、大鉾（大鉾脈）を掘りあて多量の銀鉾がでるようになったと伝えられています。

この鉾山町の間歩を中心に多田銀銅山全体の産出は、最盛期であった寛文期には年に銀1500貫目、銅70万斤（1斤は600グラム）を越え、諸運上銀（営業税）は660貫目に達する年もあったといわれています。鉾山町は栄え、家数は3000軒にも達したといえます。

このように多田銀銅山が盛況におもむいたので、幕府は寛文元年（1661）10月京都代官中村奎右衛門之重を鉾山町に代官として赴任させ、そこに陣屋を建てて多田銀銅山を管轄させることにしました。そして翌2年2月15日には、間歩のある村々を中心とする73カ村を鉾山付村とし、中村代官にこれらの村々も合わせ支配させることにしました。中村代官の鉾山町赴任は多田銀銅山が盛山を迎え幕府にとって重要な意味をもつようになったことを示していました。

西谷の間歩の盛期

寛文2年（1662）に川辺・能勢・豊島3郡73カ村が鉾山付村に指定されたとき、波豆村を除いた西谷の村々が所属しました。

西谷は多田銀銅山の中心をなす地域ではありませんでしたが、やはりこの時期に、豊臣時代と同様、盛山を迎えた間歩がありました。長谷・下佐曾利両村にまたがる千本間歩と切畑の紺青間歩であり、ほかに境野村にも新たに間歩がでたそうです。

寛文元年（1661）10月中村代官が鉾山町に赴任した当時、鉾山町の大口間歩も瓢箪間歩もともに請山（諸藩が鉾山経営を請け負わせた山）でした。採掘経営を山師（鉾山の経営者）にまかせ山師から運上（租税の一種）として出銅の10分の1を上納する方式で採掘されていました。この両間歩は年内に早くも御直山となったよう



多田銀銅山代官所跡遺跡



多田銀銅山青木間歩



青木間歩坑道内

です。御直山^{おじきやま}とは、自分山・請山に対する幕府直営の公儀山を意味します。この経営方法はかならずしも一定していませんでしたが、経営主としての山師の存在を認めたまま、直営山に近い意味で採掘のための諸資材を公給し、山師にも俸米を与え、間歩の水抜き普請なども公費でおこなうものでした。千本間歩はこの大口間歩・瓢箪間歩とともに御直山になったといわれています。他の諸間歩が請山であったのに対し、とくに御直山に指定されたことは、千本間歩が重要な間歩であったことが推測されます。

つぎに「多田銀銅山来歴^{もうしつたえ} 申 伝 略記」のしるすところから、西谷の間歩の記事を拾ってみます。17 世紀の記事を収載します。この文書の編著年代は幕末期であるので、かならずしも正確に史実を伝えているとはいえませんが、西谷の間歩についてつぎのように記しています。

長谷村領山内 凡十二ヶ所
是ハ足利家ノ御時發起、其後天正度・寛文度銀銅石多分出産有之候由申伝候

芝辻新田領山内 凡三ヶ間歩
是ハ元禄之頃發起、新聞歩之由申伝フ

下佐曾利村領山内 凡七ヶ間歩
是ハ足利家ノ御時發起、寛文度ニモ銀・銅出産之由申伝フ

上佐曾利村領山内 凡五ヶ間歩
是ハ寛文・元禄之度銀・銅出産之由申伝フ

大原野村領山内 凡三ヶ間歩
是ハ右同断申伝フ

南北切畑村領山内 凡三十八ヶ間歩
是ハ往昔起発之次第不相知、中ニモ紺青間歩ト申者は天正度豊臣公絵所狩野山楽へ被下候間歩之由申伝へ、右天正ヨリ寛文・元禄ノ頃新聞歩モ出来候由申伝候

玉瀬村領山内 凡五ヶ間歩

境野村領山内 凡式ヶ間歩
是ハ南北切畑村領山内之枝鉦ニテ、寛文・元禄ノ頃新聞歩出来候得共、鉦筋細ク出鉋少ク候、而シテ盛山と申程ノ事ハ無之由申伝候

この書に長谷村の千本間歩については豊臣氏の時代のことしか記載されていませんが、そのほか上佐曾利・下佐曾利・大原野・境野・切畑などの村々の間歩の様子の大体を知ることができます。さらに切畑村が延宝検地に小物成（江戸時代の雑税）として鍛冶炭代を納めることになったことは、銀山町・山下町にある吹屋^{ふきや}で製錬に必要な木炭の生産が切畑村でおこなわれていたことを示しているのかもしれません。

こうして寛文期には多田銀銅山は前後に比をみない最盛期を迎えましたが、その盛期は長くは続きませんでした。延宝・天和期（1673～1683）には早くも大きく産額が減じ、貞享・元禄期（1684～1703）にややもち直すものの、ついに寛文期の盛山をとり戻すことはできませんでした。幕府が天和元年（1681）代官中村^{ちくえもんゆきしげ} 杢右衛門之重を銀山町から引きあげさせ、京都代官に銀山の支配をゆだねる形にもどしたことは、多田銀銅山が早くも衰退したことを示していました。

1-4

西谷の
歴史

近世の西谷

西谷の村々と新田開発

江戸時代初期の慶長 10 年（1605）の「国絵図」によれば、西谷の村はサソリ（佐曾利）・長谷・大原野・はつ（波豆）・堺野（境野）・玉瀬・畑（切畑）が記載されています。うち佐曾利（さそり）は 3 つの集落に分かれていました。

切畑は正保年間（1644～48）までに南切畑・北切畑に分離、佐曾利は寛文年間までに上佐曾利・下佐曾利に分離、近世の村は 9 カ村になりました。

中世末から近世前期の新田開発は、長谷村の芝辻新田（map.C3）は正保年間（1644～48）以前に開発され、上佐曾利村の枝郷・香合新田は寛永 18 年（1641）に検地を受けました。新田村ほどに至らないまでも、各村で新田開発が進められ、幕府領を対象にした延宝 5 年（1677）から同 7 年（1679）にかけた延宝検地では、正保郷帳の石高に比べ、それぞれ長谷 23%、大原野 33%、境野 58% 石高が増加しています。



慶長 10 年（1605）攝津国絵図の西谷『宝塚市史』

西谷を支配した領主

戦国時代末期、西谷には佐曾利城に佐曾利氏がいましたが、織田信長の家臣・荒木村重^{むらしげ}や中川清秀の配下になり、江戸期には中川氏の国替えにより豊後竹田へ移封されました。信長の後を継いだ豊臣秀吉・秀頼の時代は、豊臣家の直轄領があったと思われ、西谷の佐曾利・長谷・大原野・境野に片桐且元^{かつもと}の領地があったことが知られています。

大坂の陣で豊臣家が滅ぶと、西谷はいったん幕府領になった後、寛永 4 年（1627）麻田藩領が誕生しました。しかし、多田銀銅山が活況を呈したため寛文 2 年（1662）、銀山周辺の村々 73 カ村を幕府直轄領とし鉱山経営を幕府が握ったほか、鉱山への炭・薪・米などを送る村々を確保しました。こうして寛文 2 年、西谷では波豆村を除き幕府領として近世の所領貞享 3 年配置が定着しました。

片桐且元の治水事業

慶長年間に少なくとも西谷の佐曾利村・長谷村・大原野村・境野村が片桐且元の所領であったことが知られています。

下佐曾利村の元禄 3 年（1690）の「池樋帳」や元文 3 年（1738）の「御普請明細帳^{ごふしん}」などをみると、ひとつひとつの溜池について、その掘削年代を、例えば「是ハ慶長元年申年片桐市正（且元）様御知行所之時御普請被成候」というように記しています。また慶長元年のほかに、同 3 年・12 年・19 年についてもこの村が片桐且元領であったときに溜池が掘られた、とする記述がみられます。そして当時は下佐曾利と上佐曾利とは一村

として扱われていたので、下佐曾利が片桐領であったとすれば、上佐曾利もおそらく片桐領であったと考えられます。

片桐且元が西谷に残した業績は大きく、また且元は豊臣氏の重臣として秀吉の死後も秀頼を補佐し、豊臣氏を代表して徳川家康と折衝した重要人物でもありました。それだけに単に自己の所領のみではなく、秀頼の蔵入地や大阪衆の所領全般にわたって多くの事績を残しています。

且元の西谷の所領であった下佐曾利・長谷・大原野・境野の4村には、その支配した時代に多くの池が掘られ、村々の用水に大きな利便をもたらしたことが注目されます。これらの村々に延宝検地がおこなわれた延宝7年(1679)までに掘られた池は、下佐曾利村に12(5反5畝2歩)、長谷村に11(1町6反7畝9歩)大原野村41(5町8畝5歩)、境野村9(1町8歩)ありました。そのうち且元の支配時代に、その指示で掘られた池はそれぞれ4・7・17・2箇所に及んでいます。延宝検地帳に記す池の面積でいえば、且元の指示で掘られた



片桐且元の肖像画『宝塚市史』

池の面積が、村にある池の総面積に対して占める比率は、下佐曾利村29.1%(1反6畝)、長谷村90.7%(1町5反1畝21歩)、大原野村80.9%(4町1反1畝2歩)、境野村64.0%(1町28歩)にのぼっています。且元が領村の用水確保につくした力がいかに大きなものであったかを知ることができます。

村名	池名	面積	掘年	削次	村名	池名	面積	掘年	削次
下佐曾利	中山池	5.18	慶長1		大原野	脇池	2.20	慶長14	
	中山池	4.00	〃1			ありせんしやう池	1.05	〃14	
	呂谷上池	4.24	〃19			南ノ下池	.25	〃14	
	田池	1.18	〃19			小南池	6.20	〃15	
長谷	小計	16.00			境野	岡田浦池	1.21	〃15	
	なき町池	89.21	慶長14			森池	12.15	〃17	
	伝兵衛池	3.00	〃14			祐泉池	12.01	〃17	
	十兵衛池	2.04	〃14			西浦谷池	6.20	〃17	
	寺内池	1.18	〃14			沢池	6.16	〃17	
	下小畑池	42.11	〃16			中林池	4.24	〃17	
	てたぎ池	11.20	元和5			行泥池	4.18	〃17	
大原野	小計	151.20			計	皿池	4.00	〃17	
	下ノ大池	208.10	慶長11			若下池	17.18	慶長8	
	上ノ大池	133.10	〃1			くいたぼうそ池	83.10	〃17	
	中西平井池	1.02	〃13			小計	100.28		
	中西平井池	.24	〃13						
	いやの谷中池	4.00	〃14						
						計	680.09		

片桐且元のときに掘られた池『宝塚市史』

村人の生活と山野

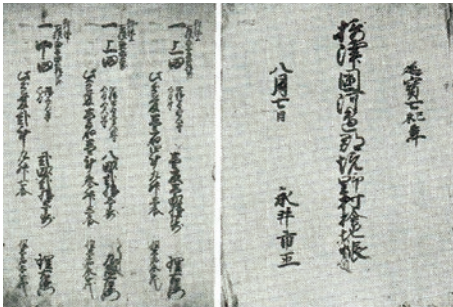
江戸時代において、村での生活は自給自足を前提とするものであり、山野からもたらされる自然の恵みは人々の生活とは切っても切り離せないものでした。山から収穫できる柿やクリ、松茸などは村人の食料となるほか、売買することで多少の現金を手にすることができました。そのほかにも、田畑の肥料(刈敷^{かりじき}といって草木を田畑に敷き詰めることで地力を回復させる手法)や家畜の飼料、燃料となる薪木や炭、建築用材など、食料以外の生活必需品も近くの山から得られたものであり、山野への依存度は高かったと言えます。基本的に地域社会内での流通が主であり、山からの恵みなしには生活が成り立たなかったといっても過言ではありません。

江戸初期の山論と延宝検地

山野をめぐる争論、いわゆる山論が江戸時代初頭にかけて多発しました。当時は山の帰属や境界があいまいであり、しかも人々の山野の利用が増大し、必然的に発生した論争でした。

江戸時代初頭、村と村の間の境界は必ずしも明確ではなく、これを明確にし、また紛争の解決・境界の確定に一步を進めたのが延宝検地でした。

延宝検地が山野境界をも対象としたことによって、これを明確にする必要が生じ、これまであいまいであった村と村との山境についての山論紛争が続発し、紛争の解決を通して山境が次第に確定されました。



境野村の延宝検地帳『宝塚市史』

長尾山の延宝検地

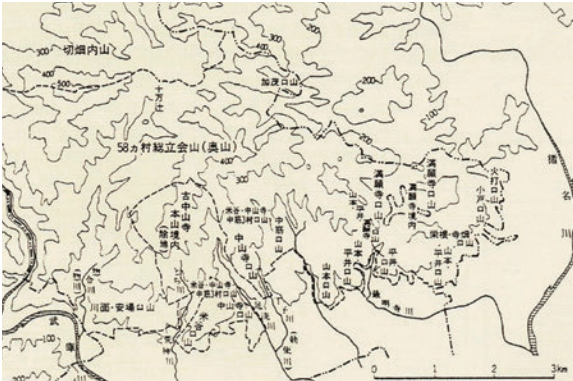
たいていの村では、1カ村もしくは数カ村が共同で利用する「入会山^{いりあい}」というものを持っていましたが、入会山を持たない村もあり、その場合には入会山を持っている村とのあいだで、利用料や立ち入ることのできる範囲を定めた取り決めを結ぶことで、山への立ち入りが認められました。近世の村社会ではお互いが山野の用益を融通し合うことで村の成り立ちを補完すると同時に、取り決めに遵守することで地域の資源を保全・活用していたといえます。

長尾山(map.C4.5)は、東はあご坂・藤の森を限り、西は武庫川を限る東西3里余、南は中山巡礼道、北は南切畑村の村限を限る南北2里22丁余の山で、切畑村を山親とし、豊島郡2カ村、川辺郡53カ村、武庫郡7カ村の計62カ村を山子とする入会山でした。この入会山はさらに口山(内山)と奥山に分けられ、口山は長尾山の麓の13カ村が利用し、その奥が62カ村の惣山子が利用する奥山といわれる場所でした。

延宝6年(1678)、長尾山は検地を受け、これを機に、入会村々から徴収して領主(幕府)に納める山手銀が130匁から260匁に増額されることになったため、利用度等を考慮し山子から脱退する村があり、山子の数は58カ村になりました。

近世のくらしと産業

西谷の村々の様子を概観するのに「村明細帳^{むらめいさいちよう}」が利用できます。村の産業は、まず稲作中心の農業です。江戸時代中期には綿作など商品作物も生産が行われ、稲作についても多品種の稲が栽培されています。寛政11年(1799)の下佐曾利村明細帳には、大こく・京白・巡礼ぼ・関東・亀山・どろかぼ・おの川・西国・ふり出し等の品種の稲が植えられ、同年、長谷村の明細帳には、白川・河内わせ・田島坊・松坂・大路坊・永代坊・まんはい・白福・福山・順礼坊・小野川・も白という品種が記録されています。



58カ村立会長尾山奥山・口山の図『宝塚市史』

農業の余業では、下佐曾利村の天保13年（1842）の「村方小前百姓余業書上帳」によると、当時の下佐曾利村の人口は231人、48軒（人口・軒数は天保14年）。このうち、木挽き9人、鍛冶屋1人、わら屋根葺き1人・大工3人、綿打ち1人、黒鋸（土木作業）1人、桶屋1人、薬種商売4人、薬種ならびに質屋1人、焼酎商売1人、小間物屋2人、塩物肴商売1人、酒造出稼ぎ1人、と計27人の名前が書上げられ、軒数にして半数以上が農業以外の余業を持っていたことがわかります。

教育

江戸時代の西谷の人々はどのような教育をうけていたのでしょうか。文部省が明治初年に調査した「日本教育史資料」によれば、寺小屋としては、西谷では大原野村の阿弥陀寺（map.B3）の荘誉が慶応元年（1865）に開業し、読書などを教え、切畑村の医師元村左中は安政3年（1856）に開業し、読書などを教えたとあります。

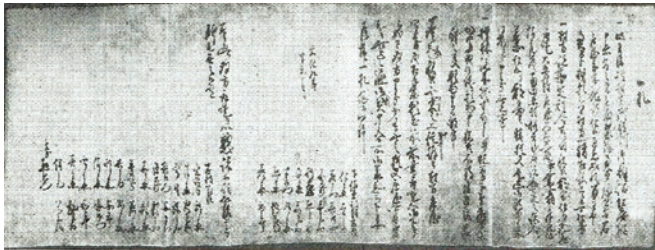
教師の荘誉は、明治6年（1873）大原野村と境野村が合同で建設した帰来小学校（西谷小学校の前身となる小学校）の教師僧藤崎壮誉と思われ、このような江戸時代の寺小屋教育は近代教育へとつながっていきます。

農民運動と社会の行き詰まり

江戸時代の社会は自作農を基本とした農業国家で、近世前期は新田開発が積極的におこなわれ、また農法の改良、肥料の普及、灌漑施設の充実などで生産力も向上していきました。しかし、新田開発可能な野山の縮小や乱開発による水害の多発などで、17世紀末から18世紀にはいと新田の伸びは鈍り、一方で凶作や年貢の増徴策なども重なり、貧富の差は拡大していきました。

天明3年（1783）の大凶作の後、同4年宝塚市南部の小浜や米谷などで打ちこわし騒動が起きました。しかしこうした非合法的な農民運動はむしろ例外で、国訴と呼ばれる広範囲で合法的な訴願運動や、村方での庄屋と農民の対立も訴訟として提訴されました。

村方騒動は、江戸中期以降に村落内部で頻発した農民運動で、村役人（村政を行う者）の年貢などの不正利用、山や用水の利用の不正などを摘発し領主に訴えたりしました。文化8年（1811）下佐曾利村で庄屋を相手に村方18人が村方諸勘定や山の利用、山手米（山の利用に課された税）負担などを巡って訴訟を起こしました。最終的に文政13年（1830）に山の所有に応じて山手米を負担することなどで決着しています。また天保年間（1830～44）の大飢饉をはじめ慢性的な凶作の中で、開国による物価の上昇、海防費の増大、長州戦争への動員等の臨時賦課などにより、長く続いた幕府体制は行き詰まり、世直しの機運が盛り上がる中、元治元年（1864）には、上佐曾利村では年貢未納を巡って小前百姓（一般農民）18人が村役人の取り調べを願って訴訟を起こしました。村では年貢未納者が多く庄屋のなり手がなく混乱していました。



下佐曾利村方騒動和談一礼 文化9年『宝塚市史』

1-5

西谷の
歴史

近代から現代へ

西谷村の誕生

明治維新ののち、近代国家の地方制度が確立されていきます。明治22年には市制町村制が施行され、現在の宝塚の地域でも江戸時代の村々の合併が行われ、同22年4月には川辺郡の小浜村・長尾村・西谷村、武庫郡の良元村の4カ村が発足しました。西谷村は、川辺郡の10カ村（切畑・玉瀬・境野・芝辻新田・長谷・大原野・波豆・下佐曾利・上佐曾利・香合新田）が合併して誕生しました。



明治21年市町村制実施時の宝塚市域村々『宝塚市史』

明治の村の生活

人口

西谷の村には大きな村も小さな村もあり、明治22年に西谷村となる12カ村の戸数は、大原野村は190戸で行政村のうちでも大きな村でしたが、芝辻新田・香合新田・南畑・北畑・立会新田はそれぞれ6戸で小さく、1村当りの平均の戸数は53.6戸で波豆村や長谷村がほぼその規模に相当していました。

村名	戸数	人口
上佐曾利	66 ^戸	302 ^人
下佐曾利	45	213
長谷	55	249
芝辻新田	6	27
香合新田	6	25
大原野	190	799
境野	74	283
玉瀬	52	224
北畑	27	129
南畑	63	289
立会新田	6	19
*波豆	53	247
合計	643	2,806

〔注〕 *印は明治14年「川辺郡第22戸長役場各村戸数人口表」による

明治12年各村の人口『宝塚市史』

農業と余業

村の農業では、米、麦、大豆、菜種などが生産されていました。

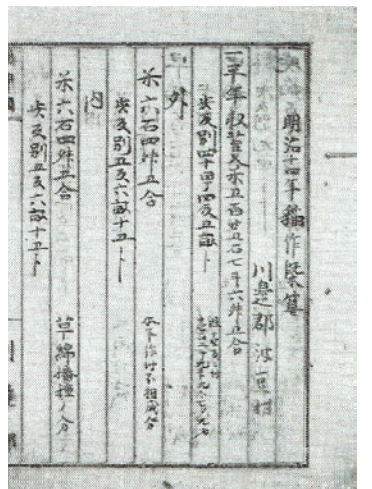
農家は農産物の生産以外に種々の仕事を余業としていました。約72%の家が農業以外の稼ぎをしており、佐曾利村では箆籬（竹で編んだ籠）をつくり、大原野村では箕を作る農家が多かったそうです。

これ以外に網や釣で川猟をするもの、あるいは許可を得て銃を持ち山猟（主に猪・鹿・鳥）をするものもありました。

山林原野の所有

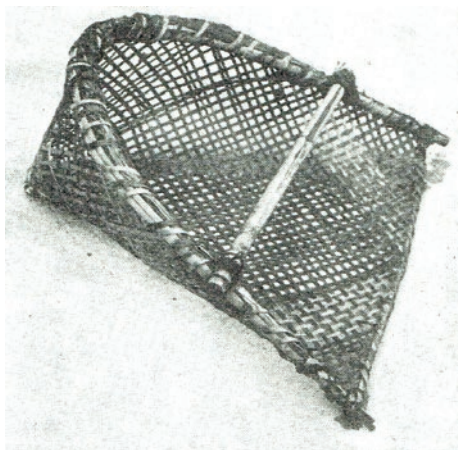
農家は生活するうえで、肥料や薪炭あるいは家屋を建てるのに必要な材木や屋根を葺くための萱の供給源として、山林や原野を必要不可欠としていました。

山林原野は、もとは村のすべての百姓が総有していましたが、百姓が個々の所有権を主張するようになり、その結果、明治になってからそれらが各戸の所有となっていました。



波豆村稲作概算書 明治14年『宝塚市史』

そのように分割をしたのは村の口山（深い山への入り口にあたるような山）で、奥山（山の深い所）は分割しないで村総有のままにしていることが多く、明治になってからも村の共有財産でした。また数カ村の共有の場合もありました。明治22年（1889年）に新しい町村が成立しましたが、その後も部落共有財産として旧村の共有形態が維持され、旧慣に従って利用されました。共有財産は面積としては山林原野が大きかったのですが、それだけではなく田・畑・溜池・墳墓地・宅地などもありました。



西谷の「たれみ」『宝塚市史』

村名	田	畑	原野	山林	墳墓地	郡村宅地	溜池	合計
上佐曾利	18.07	4.21	3.15	2308.08			373.09	2708.00
下佐曾利	13.24	1.19	9.05	5870.15		3.16		5898.19
波豆		2.12	1.00	4887.21	70.16			4961.19
長谷田	62.19	3.11	165.10	9275.22	78.03	3.28	193.04	9782.07
芝辻新	15.02		557.09	6.06	2.15	1.21	8.18	591.11
大原野	17.15	106.21	25.19	7049.08	81.09		582.18	7863.00
境野	16.18			2698.29	20.00	0.21	170.21	2906.29
玉瀬	53.21	1.29	76.02	4656.15	43.00	7.09	85.18	4924.04
切畑	149.25	2.27	326.17	460.25	38.06	10.24	251.06	1240.10
大原野・境野				2301.07				2301.07
玉瀬・境野・大原野				18807.18				18807.18

明治22年西谷村各むら共有地『宝塚市史』

近代化への道

阪鶴鉄道開通

阪鶴鉄道は、明治29年（1896）、大阪から福知山を経由して舞鶴までを結ぶ鉄道として計画されました。阪鶴鉄道は既設の摂津鉄道から路線を譲り受けて、川西池田から以西の工事に取りかかり、明治30年（1897）12月には宝塚まで、32年に三田まで、そして37年には福知山まで開通しました。阪鶴鉄道の敷設工事の最難関区間は生瀬―三田区間でした。明治40年（1907）8月1日に、鉄道国有法により鉄道庁に尼ヶ崎―福知山間の営業を譲渡し、官設鉄道「福知山線」として国有化され、JR福知山線の原型となりました。

千刳水源池

明治後期、神戸市は増大する市民の水需要に応えるため、水道事業の拡張を計画、近隣に水源を求めていきました。そして、武庫川上流千刳（map.A3.4）に水源池の建設を計画しました。明治41年（1908）4月から現地調査が行われ、翌42年、水道拡張議案が神戸市会を通過、関係町村に意見を求め、これにより、千刳のある波豆の人々は、同市の計画を初めて知りました。

波豆村は組織的な反対活動を始め、神戸市の測量による田畑、農産物等、村の受けた損害を陳述しましたが、



かつての武田尾駅（map.B4）（昭和45年）『保存版ふるさと宝塚』



神戸水道水源池千刳の堰堤

神戸市は工事に着手しました。工事は着々と進み、千刳貯水池堰堤構築工事が竣工したのは大正8年（1919）5月1日でした。

大正14年（1925年）、拡張工事施工案が可決。内容としては千刳水源の貯水池堰堤を20尺高くし、貯水量を2倍に増量する計画でした。この堰堤嵩上げ工事は昭和4年（1929）4月に開始されましたが、この嵩上げ工事によって、波豆村の移転家屋は22戸、水没した田畑、山林、宅地等は約23町歩でした。昭和6年（1931）8月、嵩上げ工事は全て終了しました。

西谷バス

西谷の人々は市街地に出るとき、三田もしくは池田へ山道を歩きましたが、阪鶴鉄道の開通後は武田尾駅へ歩くことになりました。しかし、西谷は南北に長く、駅への道のりは短くありませんでした。これを短縮するため自動車利用への要望が強くなり、道路を拡張しました。そして、大正13年（1924）7月、西谷バスが西谷の交通機関として誕生しました。乗り合いバスの運行によって、西谷村の人々は阪神間にきわめて便利になりましたが、しかしまだ貨物自動車はなかったので、生産物の搬出や物品の運搬は、荷車あるいは荷牛車によらなければなりませんでした。



岩谷を走る西谷バス

宝塚市へ合併

戦後の新憲法下では、自治体の行政基盤を強化し地方自治を確立することが重要な課題であり、「町村合併促進法」、「新市町村建設促進法」が施行されました。昭和20年代から30年代前半に町村合併が進み、市町村の数は約3分の1に減少しました（昭和の大合併）。宝塚市はこの動きの中で誕生しました。

当時、現在の宝塚市を構成する良元、小浜、長尾、西谷の各村々には、伊丹市や西宮市、川西町など近隣の市町との合併の動きが幾度となく起こりました。

宝塚市は昭和29年（1954）4月1日、武庫郡良元村と川辺郡宝塚町が合併して発足。県下15番目の市となりました。

翌30年3月10日に長尾村が、また、3月14日に西谷村が編入されました。

昭和29年（1954年）4月1日の宝塚の人口は、40,581人、面積は28.3km²で、長尾村、西谷村が加わった翌30年4月1日には、55,205人、101.8km²となりました。